

## 令和7年度 第4回 松本「シンカ」推進会議 要旨

日時：令和8年1月26日（月）

13時30分～

会場：松本市立博物館講堂

### 1 開会

### 2 総合戦略局局长あいさつ

### 3 座長あいさつ

### 4 議題

#### (1) パブリックコメント等の結果報告

#### (2) 「三ガク都のシンカ」について

※部会の枠を超えて3グループに分かれてグループワーク

### 5 主な意見

#### (1) パブリックコメント等の結果報告についての主な意見

特になし

#### (2) 「三ガク都のシンカ」についての主な意見

##### <「岳」について>

- 松本市では、市民が「自然が近い」と感じる一方で、実際の里山との日常的な関わりが少ない現状がある。山を「見るもの」に留めず、適度に利用し資源としての恵みを感じることで、地域への感謝や意識が芽生え、ひいては里山の保全にも繋がる。山が当たり前存在し、市民（特に若者）との有機的な接点が不足していることがクマ問題などにも影響しているため、今後10年をかけて、まちと里山を含む山の間、市民が主体的に関わり、日常生活に溶け込むような「有機的な関係性」を構築していけるといい。
- ニューージーランドの首都ウェリントンでは、市民が身近な自然を手軽に日常的に楽しみ、それが生活の質や地域への当事者意識を高める源となっている。この自然との密接な関わりは、幼少期から親・学校・コミュニティが一体となり、「お金をかけずに自然を楽しむ」という徹底した「エリート教育」を受けていることに起因しており、このような環境づくりが日常的に自然を身近なものとしていくために必要ではないか。
- 「岳」は北アルプスや上高地を連想し、外国人などの観光客は訪れても、地元の人あまり訪れない印象がある。学校登山も減ってきていると聞いており、小中学生が上高地へ行く機会があまりないと思う。松本に住むと豊かな自然を感じられ、体験もできるということがあまり伝わっておらずもったいない。
- 近年、森林の大切さやその価値は高まっているが、林業の担い手は減少し続けている。その結果、

熊が人里に出没するなどの問題も各地で発生している。森林の重要性について話すと多くの人が共感を示し、実際には誰もが森林をはじめとする自然資源の恩恵を受けているにもかかわらず、市民としてできることには限りがある。

- 災害が起きたときだけその重要性を思い出すのではなく、日常の暮らしの中で自然との関わりを意識し続けることが重要。自然資源の価値を多角的にとらえ、日常生活の中でその恩恵を意識し、自然との関わりを意識し続けるという視点を、今後の取組みのベースと捉えるべき。
- 自然の恩恵を生かした取組みをしている自治体としては、島根県海士町や岡山県西粟倉村が思い当たる。また、東松島市の「KIBOTCHA (キボッチャ)」は、廃校を買い取って宿泊施設兼地域インフラとして活用し、人との関係性構築や地域食材の提供を通じて、大規模な関係人口創出の場となっている。
- 三九郎などの行事を通して子どもたちが清掃に参加するなど、かつて女鳥羽川は美しく、水がきれいで井戸が多いという思いを上高地に重ねていた。今は、山は山、水は水と分断されており、自然の恩恵を受けているにも関わらず、それを実感できない。とても良い資源を持っているのに、その価値に胡坐をかいているように感じる。
- 松本らしさは緑との近さだと思うが、駐車場になってしまうなど、休める場所としての緑が減っている。住民管理の緑と行政管理の緑があり混在しているところもあるが、きっちり分かれすぎているところもあるので、うまくつながってくると松本らしい良さが出るのではないかと。緑を例に挙げたが、様々な物事が越境するような形になってくると、もっと松本らしさが出ると思う。

#### <「楽」について>

- 「楽」は「文化」という要素しかないのか。単純に「楽しい」という要素もあると思うので、広めに解釈することもできるのではないかと。
- 「楽しい」には、買い物やまちを歩いて「楽しい」、おいしいものを食べて「楽しい」という、ゆるい意味合いが「三ガク都」には欠けていて、信州らしい真面目な印象。駅についても、交通機関としての役割が強く、楽しくまちを歩くという印象はあまりない。まちを楽しむことは若者が定着する上でとても重要である。
- 腸内の虫や皮膚などの常在菌との共生を促し、特に幼児期のアレルギーや免疫機能の向上を図るため、保育園・幼稚園・認定こども園の園庭や小学校の校庭に森を作り、家庭菜園を充実させることを提案したい。
- 「楽しむ」をクリエイティブと捉えると、食べ物を作るということはとてもクリエイティブなこと。家庭菜園についても、子どもたちが自分が食べるものが作られることを実体験として吸収できるので、とてもいい。そのくらい「楽しむ」ことを広くとらえてもいいのでは。
- 若者にとって、楽しい「楽」はなんなのかを考えないと、人口の流出は解決しない。若者の意見を尋ねると、松本が嫌いということではなく、自分が一番好きなものがないため、東京へ行きたがるような印象。ただそれも、「ただ出会っていないだけ」、という可能性もある。
- 女性からは、松本市にやりたい仕事がない、という意見もある。
- 卒業して東京へ転出しても松本市に関わり続けるという意識はあるものの、いざ東京に出てきらびやかなものに触れると忘れてしまい、地元とのつながりを維持することができなくなってしまう

う。ある程度の年齢の人と、若者とでは感じる魅力も全然違う。

- 大きな文化を前面に出すより、プレイヤーを育てるという観点で、才能教育を進める方が松本らしいと感じる。
- 松本の規模では文化を市内で循環させるのは難しく、外部との交流が不可欠である。市内の活動者の大半は移住者で、県外の活動と兼務する者も多い。長野県は都市部からのアクセスが良く、外部の人が「中の人」として地域や他の外部の人と交流することで、知見が循環し、文化やリテラシーが向上する。このムーブメントが起きれば、松本市は県内で「何かが起きる場所」として象徴的になれる。課題は「場」であり、空き家の有効活用ができるようにしてほしい。
- 小さな場所が複数拠点として存在し、それらが横につながるネットワークのある、活動の「場」の候補はある。経済目的でなくとも人が集まる場所が重要。ライブハウスなどプロ同士の交流の場は存在するが、素人、セミプロなど多様な人々が交流する場が不足しており、機会が少ないと感じる。
- 活動の「場」づくりを進める上では、民間と行政が協力しながらの方が、「松本らしさ」のある内容になると思う。民間と連携して定期的にイベントを開催するなどして、毎週地域のアーティストが訪れるような「場」が理想と思う。
- アーティストバンクはあるものの、活動や活動をしている人にアクセスしようとしても情報がわかりにくい。旅館の宿泊客に対する語り部を行う、講演を実施する、山歩きに案内するなど、様々な体験を提供したいと考えていても、どこにアクセスしたらいいかわからない。松本の知恵袋や人材バンクのような仕組みが活用しやすく提供されると良いし、「地元にいる知識人」のような細やかな情報も共有してほしい。
- 昔持っていたビジョンを今求めていくような傾向にもあるが、いかに経済と結び付けていくかが大事。例えば、アートとビジネスのマッチングにより新たな魅力が生まれる期待があり、松本市であればそれも可能と思うが、どこに働きかければいいかわからない。しかし、行政がコーディネートするべきではなく、公設民営の形態が望ましい。
- NPOが活動を始めた当初は、横の連携を構築することが難しく、フォーラム等を立ち上げて継続しないことが多い。このような時に、「松本市民アーツネットワーク」が人をつなぐ役割を担っている。アーティスト4名で構成され、これまで年1回イベントを開催してきており、現在は月1回の文化教室を実施している。公設施設ができる前に、このネットワークが実験的にプレパイロットとしての体験やコーディネートを請け負う環境ができればよい。
- 松本市には活動の「場」としての施設はあるものの使いにくい。どのようなコンセプトで運用し、いかに適切なマッチングにつなげることができるかが重要だ。「なんとなく楽しかった」で終わらせるのではなく、具体的な成果に繋がる必要があり、そのマッチングを検討するには高い専門性と能力が求められる。
- 松本は外部から「面白い」と評価されるものの、活動の「場」の選択肢が限られがちである。上土地区など新しいものがあるにもかかわらず活用しきれておらず、多数存在する物件や店舗も老朽化により使えないものが多く、ほとんどが未稼働という現状は非常にもったいない。
- 管理が行き届いていない場所が多い中、小規模で気軽に使える場が求められている。カフェ利用は費用がかさむため、例えばお寺をライブ会場として活用するなど、活用の可能性を広く検討し、

これまで考えられなかった場所も積極的に活用すべきでは。

- 松本駅前には空き家が目立ち、県外からの訪問者に「みすぼらしいまち」という印象を与えてしまう。また、建物跡が駐車場になっているケースも多い。有名建築家による大規模建築の成功事例のように、突出した何かを創出することも有効な解決策となり得る。
- 松本市では、もっと多様な場所で様々な活動を実施すべき。まつもとぼんぼんやあめ市など、市民は祭りには集まる傾向があるが、イベントへの期待感が薄れている印象。小規模でも良いのでより多くの活動やイベントを実施することが望ましい。
- インバウンドが増加している今、外国人観光客が朝市などに参加し、まち全体が賑わえばさらに面白くなる。例えば、道の駅のような小規模な野菜販売の場を設けることも考えられる。松本市は観光地だが、現状そのような仕組みが欠けている。
- 海外からの観光客は観光だけでなく体験も求めているが、松本市には体験型コンテンツが少ない。ミニチュア作家の元へ観光客が訪れていることや中町への買い物客が多いことから、細工体験のような参加型プログラムがあれば、松本市の魅力をさらに高めることができるのではないかと。有料でも体験したいという人は多いと聞く。
- 安曇野市での店舗経営経験から、松本市のまちなかには買い物の場や職人技に触れる機会が不足していると感じる。特に大名町は、イルミネーションはあるものの、夜間に営業している店が乏しい。市立博物館設立時にも一角を活用すべきと提案した。市民広場や発信できる場を作るべきだが、既存の垣根を守りたいという意識が強いと感じている。
- 松本市は欧米系旅行者が多く、2ランク上のまちを目指せる文化的可能性を持っている。観光の質が変化していく中で、将来的にアジア圏からの文化を求める観光客が訪れるようになった際、それを受け入れ、潤うことができるまちであると思う。
- 博物館をもっと有効活用すべき。活用の部分については、民間が担うべきと思う。
- OMF期間中にヨーロッパから来訪したLGBTQ+の旅行者が、松本市に滞在中に他に面白そうな場所が見つからず、同じ店に連日通うこともあったと話していたことがある。裏町の狭い店以外に魅力的な場所が少ないとの意見や、外国人が集まるようなライブハウスも外国人向けとまでは言い難いと感じており、外国人観光客のニーズに応える潜在的な「受け皿」が、まだ認識されていない形で存在する可能性はあるが、顕在化していない。
- よく利用するヴィーガン対応の店は外国人客が多く、外国人客の需要が高いと感じる。夜の時間帯にヴィーガン対応している店舗は少ない。朝食を提供する店はあるが、夜の選択肢が限られてしまう。
- 外国人観光客について十分な情報がないと感じており、YouTubeで「何をしに松本に来たのか」をインタビューする企画を松本城の近くで実施したことがある。こうした企画は本来市が実施し、民間などの取組みにつなげる必要があると思う。
- 外国人観光客の現状満足度には疑問がある。彼らは松本城が主な目的で、訪れた後は中町など雰囲気のある場所を散策して観光を終えるのではないかと。連泊が増えても、丸の内周辺や温泉地への恩恵は限定的ではないか。松本市は小規模宿が多く、自然の恩恵を受けられる場所が点在しているようなまちはほかに少ないことから、白馬のような滞在型リゾートとしての可能性を感じるものの、まちなかに温泉がないのが課題である。

- 松本に長く滞在する観光客は少なく、滞在型観光の確立が課題。実際、自分も若いころは、松本には1日あれば十分だと感じていた。
- 宿泊料金については、旅館の一泊二食付きプランより駅前のビジネスホテルの方が高くなる場合がある。これまで地元客向けだったのが観光客向けにシフトしつつあり、飲食店も同様。その意味で、松本市は発展途上であり、ヴィーガンアイスクリームの開発など新しい取り組みも始まっている。
- 松本市は長野県の他の地域より、様々な商圈として流通する地域だと思う。他地域では商工会議所が外部企業を排除する例も聞くが、松本市にはあまりそういうことはないのではないか。従業員の多くが市外の人、外国人など、地元の人だけではないような店はもっとあっても良いと思う。地元の人に受け入れられる店を作ろうとする傾向があるが、利益を最優先してインバウンド需要を狙うのも当然の流れではある。
- 外国人客が多く訪れ、リピーターの外国人も多い飲食店がある。このような店は成功例として広まってもよさそうだが、広まっていない、同じような店を作らないことに疑問がある。
- 白馬の店の一例だが、「地元の人を大切にしないといけない」という理由で、店舗では異なる入り口を設け、厨房を2つ作り、店内を区切っている。通常の入り口から入った客には通常メニューを提供し、外国人用の入り口から入った客には英語メニューを提供しており、その価格は通常の2倍に設定している。
- 松本らしさは、まちなみにレトロとモダンが調和しているところだと感じる。「商都」という言葉はおもてなしを意味すると考えている。あめ市は、市民が市民をもてなす、松本らしいイベントである。同時に、外国人に対してもホスピタリティを高めていけるとより良いのではないか。
- まちの人が自らまちを盛り上げるべきだが、商店街の人々は本業が忙しい。だから、中心市街地においては、その地域が好きだから関わっている地域外の人が、祭りなどを仕切っていくやり方が受け入れられる風土があると感じる。松本を楽しく面白く、賑やかにできたら良いと思っている。
- 歴史と文化は日を重ねるごとに価値が高まるものであり、それが松本には備わっていると感じている。祭りなどもその一つであり、そういった取り組みやお祭りが途絶えないようにまちづくりを進めていきたい。松本市に来ないと、松本市の歴史や文化を体験できない、そういった体験や経験ができるという点を人呼び込めると良い。
- 伊勢町周辺には善光寺街道があり、また野麦街道も通っているが、市民にはその存在や入口が知られていない。松本の路地には車が入れない昔の建物がある道が残されており、これらを「歩いて楽しめる」ように整備し、「見える化」してアピールすることで、観光客や外国人からより魅力的なまちと感じてもらえると思う。
- これからの時代は、とがった特徴が必要である。松本には上高地や松本城といった特徴的なものがあるので、これらを積極的に活用し、松本を訪れる人が増えることを期待する。松本は豊かであるが、この豊かさに安心せず、「俺たちのまちなんだから」という意識で、住民以外の人も意見を出し合ってまちづくりを進められると良い。
- 中心市街地では、空いた土地を貸してしまう。住んで暮らす土地になれば、もっと違うまちとなると思う。
- 内側の人だけでは限界があるので、外から来た人が新しい刺激となってまちが活性化すると良い。

- ビルの上層部が空いている場合、学生に貸し出すことはできないだろうか。低層部の商店で学生がアルバイトをすることで、楽しい生活の印象を持てれば、いずれこの地域に戻ってきてもらうことにつながるのではないか。

補助金などを出す際も、東京などの企業ではなく、地元企業に還元していくべきである。地元企業が強くなり、松本駅前の商店街に経済が循環する仕組みができると良い。パルコが閉店して、賑わいの主役はあくまで市民であると強く感じた。花時計公園でイベントを開催すると人が集まるため、イベント開催が常態化し、週末には必ずイベントが行われているような状態になることが望ましい。

#### <「学」について>

- 「学び」は「エンジョイ」を通じて深まり、特に探求活動での「楽しさ」が、将来にわたる「学び続ける」姿勢につながると考える。理想は、主体的に活動を創り出し、学びが自然に日常に滲み出る状態。第12次基本計画のパブリックコメントの結果からも多くの市民がまちづくりを「自分ごと」と捉えていることが分かり、そうした方々と共に進めていく体制の構築が重要。行政との連携は思いを共有する場で進んでいるが、今後はより自然発生的にみんなでまちづくりを進めることが「楽しい」につながるようになってほしい。
- 「学」には育つ・育てるという要素もあると思う。若い世代の定着のために、育てやすい、自分の子どもが育っていけるまちということが伝わるようになってほしい。
- 「学ぶ」というと子どもをイメージするが、市民が貪欲に学び続ける雰囲気やまち全体がラーニングコミュニティとして教え合ったり、特定の年代に限らず、高齢者も含めて自分を高めていきたいという欲求に応えることができたりする環境づくりが必要では。
- 都会の先進的な探究学習のレベルは非常に高いので、地方とどんどん差がついてしまっている。むしろ、松本でなければできない学びをしっかりと位置づけ、学ぶという面で松本からの流出を防いでいかなければいけない。
- 「学び」の概念が少し硬い印象なので、「学びを楽しむ」概念へと捉え直し、子どもたちにその本質的な楽しさを教えることが重要。ただ、持続可能性が失われてしまうので、この取組みを進める上で、行政は主導しすぎない方がいい。資金提供に頼らない手法や、デジタル技術の活用などにより、「薄く広く」働きかけることが有効ではないか。
- 「学びを楽しむ」環境が松本市にある状況は、地域住民だけでなく、移住希望者や観光客といった多様な層を引き付ける多面的な魅力となり、地域と交流する接点としての可能性があり、関係人口の増につながるのでは。これは、市外の大学へ進学した若者も含め、年齢、地理的なものを越えた関係づくりができる重要な要素である。
- 教育現場での自然体験活動へのニーズは高いものの、地域の教育予算不足が長年の課題であり、結果として「資金のある者が教育に力を入れることができる」という教育格差が顕在化している。特に、都市部では、自然体験は容易に実施することはできない。そして、不登校児童が増加している中で、高額な費用を支払ってでも自然体験の受入れ先を求める声が高まっている。この状況を受け、受入れ側地域は、都市部からの利用者受け入れを積極的に行い、その機会に合わせて地元の子どもたちへも機会を提供するなど、共存モデルとして波及させることも検討が必要である。

- 社会教育は県内どこでも盛んではあるが、本来市の社会福祉協議会が社会福祉活動計画を作るものだが、各地区や町会、公民館等がボトムアップで計画を作っていたのが松本市の特徴。年々少しずつ停滞しているように感じるものの、住民自治の意識は根付いていると思う。
- 公民館で日本語教育をしていることを市外の人に伝えると、「公民館って貸館以外にそんなこともやっているんだ」と驚かれる。松本市では公民館が学びの場としての役割を果たしてきたのだと思うし、これは学都としての松本の特徴をよく表わしていると思う。
- 祭りの道具を氏子以外の人がなかなか触らせてもらえないような独特の風習を開放し、新しい人を排除しないようにすべき。松本には良いものがたくさんあるので、子どもたちに触れさせ、ふるさと感を持ってもらえるようにしたい。「継続は力なり」ではなく「継続は義務」と捉え、地域や公民館が主体となって、地域文化を残し、つなげていくことが重要である。
- 一度体験すれば面白さを実感する人が多いにもかかわらず、子どもや若者の体験へのハードルが高いと感じる。教育カリキュラムとして位置づけることで、活動に触れる機会を増やせるのではないか。例えば飯田市が人形浄瑠璃の維持保存のために地域の子どもたちに経験させているように、日々の生活の中に活動を組み込むことが必要かもしれない。
- 全国的な流れではあるが、松本市にも多様性や自由意思の尊重からPTAが無くなる地域があり、同様に町会への加入も任意になっている。「なぜ活動に参加する必要があるのか」を説明できないと参加者が減少し、地区の伝統行事の維持が難しくなる。子どもだけ、町会だけ、高齢者だけではなく、様々な層が関わり、「なぜその活動が大切なのか」を理解してもらった上で参加してもらうことが重要である。地域の連携を失わないためにも、学校と地域のつながりを再構築し、維持継続していく必要があると考えている。
- PTA活動など、マイノリティ側が自らマジョリティの活動に参加することは難しいと感じており、活動を主導する側や多数派からの積極的な呼びかけが重要であると考えている。また、地域の活動が義務として捉えられがちなため、義務感や参加しづらさを生んでいると思う。そのため、もっとオープンで楽しそうで、参加意欲を掻き立てるような仕掛けが必要だと考えている。
- 多世代がコミュニケーションをとる機会が少ない。世代間の継承が希薄になっているため、外国人だけでなく日本人同士も交流できる公民館のような場が重要である。そのような交流の場の在り方を見直す必要がある。

#### <「三ガク都」全体について>

- 基本構想で掲げた三ガク都のシンカについて、「シンカ」とは一つに「非日常から日常へ」という意味もある。日常で山をどれほど身近に感じているか、まちがどれほど学びの場となっているか、どれほど幅広い芸術に触れたり親しんだりすることができているか、ということ。
- 「楽しい」は、「岳」にも「学」にも当てはまる。合理性や効率性とは一見無駄に見えるが、「楽しむ」というゆるさは、豊かさと幸せに密接に関係しており、まちのあらゆるシーンや人の心の中にあると良いと思う。
- 三ガク都に「エンジョイ」という要素が乏しいように感じる。松本だからこそ楽しめる食、風景や体験、学びなど、3つの「ガク」の結節点としてとても重要。
- 基本構想にある5つの行動目標については、市は市民が行動できる環境を整え、市民が主体的に

関与し、学び、挑戦し、失敗も含めて結果を認め、それを繰り返すサイクルを実現することが基本構想における取組み。自分ごとになれば不満も生まれにくく、2030年にこの環境や土壌ができていたためには、どんな言葉で意思疎通をしていくのがよいか、どのような仕掛けが有効かを考えることは、3つの「ガク」全てに通じる。

- 若者が地域に愛着を持ち、将来に希望や学びを見出せるように、成功や失敗の体験を通して成長する「素敵な大人」というロールモデルが地域に存在し、高校生など子どもたちにその姿を示せるまちになるといい。
- 今の松本、昔の松本、地域資源など、「三ガク都」を象徴し、そのコンセプトが可視化されている場所がない。単なるスローガンに留まってしまわないよう、そこに行けば松本を知り、学ぶことができる、大掛かりなものではないふらりと立ち寄れるような敷居の低い場所が必要ではないか。そこから、色々なものやことへいい意味で展開できればいい。
- 「三ガク都」は、住民がそれを意識して生活をしてきたというより、松本市を対外的にアピールする言葉のように思う。中心市街地の大型商業施設が閉店するなど、この5年間でも環境が大きく変化していることから、「三ガク都」のイメージは沸きづらくなってきており、住民が普段の生活から意識し、それがベースとしてまちづくりが進むようになるといい。
- 「三ガク都」という言葉を通じて、このまちにいて幸せを感じることができる瞬間があるということ、まずは住んでいる人に伝えることが重要で、特に小中学生がこのことを理解してほしい。小中学生については、楽しんでいたことが後から「三ガク都」だと気づくくらいがいいのかもしれない。
- 3つの「ガク」の関係性は、1つを取り上げて残りを2つを牽引していくという関係というより、何か1つを取り上げると、それが「従」となり他の2つが主役になるという側面もあるように感じる。
- 私たちが暮らす環境の基盤は自然だが、身近に自然を実感する機会を失っており、その要因の把握が重要。文化や人のつながりが不足している、プレイヤーはいても接触機会がないなど、人々が何に潜在的な欠乏感を抱くのかを考える必要がある。松本は環境に恵まれているものの、外部からの評価ほど人とのつながりは強くなく、文化に胡坐をかいているようにも見える。
- 活動する機会を提供する上で、気軽に利用できる安価な場所や無料のスペースが少なく、既存空間も使いにくい。イベント会場は手狭でより広い場所が必要と感じ、また、空き家があるにもかかわらず利用可能な場所を見つけるのは困難。場所があれば集客は可能だが、その確保費用を主催者が負担し続ける現状がある。

#### <その他>

- 自然や文化、防災など多角的に山を学ぶマイスター講座が、学生ではなく一般向けに始まった。このポイントは単体ではなく掛け合うという「越境」という発想ではないか。世代の越境、他の地域との越境、3つの「ガク」の越境など、「面」としての展開が期待できる。個別で実施するには「もったいない」と感じる活動を掛け合わせることで多くの機会が創出できると思う。合わせて生じる、誰がやるか、資金はどうするかという問題への対応も必要
- 一人ひとりが豊かさや幸せを実感できるようにするためには、同じ目標を持つ仲間とのつながり、

チャレンジの機会があること、その挑戦に対する承認という一連のサイクルが不可欠で、これが次のチャレンジへとつながっていく。チャレンジを促すためには、単に財政支援をする、人材のマッチングをするということに留めず、このサイクルを適切に回していくことが重要

- 松本市は、車が無いと不便なまちになってしまっており、車が無くても問題ないレベルで公共交通機関を導入していくことは難しく、結果、車の流入や量を抑えるには、強制的な規制をするしかなくなってしまう。公共交通機関の方がいいという意見もあるものの、バスの需要はあっても運転手がいけないといった運営面での課題や、ちょっとした買い物などには車の使用は避けられないという実情もある。また、自転車を使うにも道が狭いなど危険な道が多い。このギャップを埋めるイノベーションは大きな課題である。
- SDGsについて、当初は外部からの押し付けとの印象もあったが、経済・社会・自然の関係性を改めて考えると、経済と自然が対立するものではなく、むしろ自然という土台の上に経済や社会が成り立っているという構図であることを再認識した。この理解を基に、今後もSDGsへの取り組みを進めていくべき。
- 策定されたビジョンや計画に対しては、単に目標を設定するだけでなく、その目標にどのように到達し実行していくかという「流れ」が重要。目指すべき姿は抽象的になりがちで、全員が同じ考えを持つことは難しい。ただ、20年から30年先にやるべきことが明確になれば、自然環境の保全が不可欠であることが見えてくるし、それが結果的に「稼ぐ力」にもつながる。自然と経済のつながりが明確になるはず。
- SDGsの視点から、従来の経済構造で稼ぐことの限界と課題が浮き彫りとなる。社会的な側面も含めて、環境保全と経済活動を結びつけ、そこに新たな価値や資金が生まれる仕組みづくりが必要。資本主義の構造から完全に離れることはできないため、松本市がどの分野に注力すべきかを突き詰めて考える必要がある。
- 20年前、「文化と経済」「文化による経済」をスローガンとしたまちづくり運動があり、「クールジャパン」という発想の元、当時から日本独自の強みを経済的価値に転換する視点があった。この観点からすると、松本は非常に強みを持っていると感じる。
- 経済の視点から入っても、最終的には山や水といった自然を守るという発想に行き着くと思うので、やはり目指すべき方向性を明確にしていく必要がある。1～5年の短期的な視点だけでなく、20年先、30年先を見据えた施策を考えるべきではないか。
- 中心市街地の衰退やコミュニティの崩壊が指摘されていた時代に、松本の人々が郷土を誇れる共有の象徴を模索したことがある。その時はかつてのまちの賑わいが衰退した際、心に訴えかける存在としてプロサッカーチームが良いと考え、松本の市民性を刺激すれば功を奏すると見込んだ。このように、過度でなければ、心に訴えかける象徴的な存在が地域の誇りや活力に繋がると思う。
- 明確な方針を打ち出すべきだが、日本は意思決定がしづらい社会。イギリスは1988年頃、経済復興のため、音楽、ファッションなど特定の産業に注力することで、既存産業も牽引してきた。ダメなものは自然に衰退していくという時代の流れを受け入れるべき。一方で、日本では同調意識が強いため決断が難しく、松本のような規模の都市ではその傾向が顕著であると思う。
- 注力する産業について方針を決めるには、松本市はネタがありすぎる上に、昔ながらの知識を持つ人たちからの意見も出てくるので進みづらい。他自治体では注力する先が消去法や一点突破型

で決まる例もある。松本市は上高地で、バス電動化と自動車の乗入禁止という突出した取組みはあるものの、このような特徴から環境先進都市として売り出すことができていない現状がある。

- 松本は恵まれた環境にあり、松本城など象徴的な「場」が多数存在する。コンテンツ創出やそれを生かす「場」作りは困難だが、松本は既に「場」を持っている。課題は、これらの「場」を生かしたコンテンツをどう結びつけ発信するかであり、松本は「場」を持つがゆえの悩みがある。ヨーロッパでの経験を通じて松本の山の雄大さに気づき、国内に類を見ない特別なまちだと外に出ることで松本市の良さを実感した。
- 他者を受け入れてほしいが、よそのものからすると、なかなか受け入れてもらえないという印象。10年以上経過して初めて信頼してもらえるように感じる。
- 松本市は、規模感や活動者の点在具合が「ちょうど良い」と感じている。介護福祉士の資格を持つ立場から、介護においても外国人とどう向き合うかという視点が必要になってきている。「住民」を考えたとき、外国人か日本人かという区別は不要であると思っている。
- 賑わいという言葉から若年層や子育て世代を連想するが、10年後にはそういった人々がいなくなってしまうのではないかと懸念している。それは、松本市にこれといった産業がなく、若い人の職が不足し、結果として子どもたちが松本を離れてしまうのではないか。今から新しい産業を生み出すことは難しいため、松本の災害の少なさやゼロカーボンへの注力といった利点を生かし、企業誘致に取り組むことが必要だと考えている。
- まちに出なければ理解できないことがある。1981年の国際障害者年以降、まちに出る障がい者の数が増えたことで、バリアフリーが進んだように、人がまちに出ることで関係性が生まれ、人と人のつながりが広がるのが大切なのではないか。
- 市民が関わりたいと思えるようにするためには、2030年のまちの姿を市民と共有することが重要である。松本市らしい守るべきもの・残すべきものに新しい人が関わっていくためには、動機付けが必要だと思う。
- PTA、町会、祭りといった地域活動において「やらされ感」がある状態は問題であり、「楽しいからやっている」という状態が理想。特に、子どもの親世代の間にやる気のなさや「やらされ感」が見られるため、これらの世代の意識改革が必要であると考えている。
- 地域活動には、一定の大変さの先に楽しさが待っているという側面がある。区長の経験からも、事前に「これだけの大変さがある」と具体的に説明し理解してもらった上で活動に取り組む方が、参加者は心構えができ、より真剣に取り組むことができるのではないか。
- スキー教室に参加した際、連れて行った子どもは始まるまでは不安を感じていたが、終わってみると楽しかったと言っていた。まずはやってみて成功体験を得ることが楽しさを感じる上で重要である。親世代が同様の経験をしてこなかったために子どもにその機会を与えられないのではないかと思うので、まずは親のマインドチェンジが必要。経験して楽しむことで次のステップに進めるはずである。
- コロナ禍によって地域の交流が分断された。今後、その交流をどのように回復させていくかが重要である。住民が主体となって様々なものを創り上げていくことが「松本らしさ」であるならば、人と人とのつながりを強化していくことが必要である。
- 空き家をグループホームとして格安で貸し出すことができれば、空き家問題と障がい者の社会進

出という二つの課題を同時に解決できるのでは。以前、身近に知的障がい者の方がいたが、冬になると雪かきを手伝ってくれて他の住民が非常に助かっていたという経験があった。障がい者が社会進出することで、住民の意識も変化するだろう。

- 「シンカしている状態」とは、松本市の価値が高まり、暮らし・経済・文化が持続的に成長していることである。また、人口が減少したとしても、松本らしさを継承し世界へとつながり、市民が誇りを持ち、若者が将来を期待する街となっている状態を指すと思う。
- 「人口についてのシンカ」とは、人口減少が現在よりも緩やかになり、若い世代の定着が増えることである。また、移住者や関係人口が増加し、子育て・教育環境が移住の「選ばれる理由」となっている状態を指すと思う。
- 「地域経済についてのシンカ」とは、観光、製造、ITなど、多種多様な産業が伸びている状態である。中小企業のDXが進み、人手不足が解消されて生産性が向上する。また、多くの地域企業が若者の就職先として選ばれるようになる。さらに、スタートアップや副業を希望する人が松本に集まる、という流れができていることを指すと思う。
- 「まちづくりについてのシンカ」とは、中心市街地が「歩いて楽しい街」として賑わっていることである。公共交通が便利になり、車に頼らなくても移動が便利で楽しくなっている。さらに、公園・文化施設・街並みがアップデートされ、市民の誇りとなっている状態を指すと思う。
- 「様々なもののシンカ」とは、再エネ、ゼロカーボン、循環型社会など環境配慮が進んでいることをはじめ、松本の自然・文化などが国内外に発信され、観光の質が向上することをはじめ、種々の国際的なイベントが松本で開催されるようになっている、行政・大学・市民・企業の連携が進んでいる、危機対応力（災害など）が強化されている、などのことを指すと思う。

<全体共有後のまとめ> ※山本座長

- この10年間でマインドセット、モチベーションの変化が起こっている。まちづくりの推進について、なぜやりたいのかを考え、動機づけのための仕組みや仕掛けが必要である。
- 民間が作るものは貨幣換算しやすいが、自然など貨幣換算できない価値をどのように位置づけるかといったことを考えることができる。松本市が何に重きを置くのかを改めて考える必要がある。
- 関わりについては、人数よりも関係性が大事。今後10年間でまちの中にどれだけ良い関係性を構築できるかが重要で、この点を意識しながら後期計画の5年間を進めることで、2030年を良い形で迎えることができると思う。